

五、平将門と善淵王

たいらのまきど

よしぶらおう

平貞盛は平将門が反乱を企てておると、時の政権をバックにして、ライバルの将門をたおそうと考えていた。さらに将門が製鉄所をつくり、武器や甲冑を製造して、反乱を企てていると朝廷に訴えようとしたものであろう。地方に居って、醜い争いのまきぞえを食うよりも、将門を中傷するため上京し、それをきっかけに立身出世をしようというものであった。

そこで平貞盛は、承平八年（九三八）二月中旬東山道を京都に向けて出発した。これを聞いた将門は、百余騎の兵をひきいて、まだ碓氷峠には厳雪のある季節これを蹴ちらして峠を越え追撃した。当時の東山道は小諸・海野・上田を経て、そこで千曲川を渡り浦野・保福寺峠と過ぎて松本にはいるのが順路であったが、貞盛はこの経路をとり、小諸の西、滋野の総本家の海野古城に立ちよって、善淵王に助けを求めて来た。

善淵王と平貞盛との関係は、貞盛がかつて京都で左馬允の職にあった時信濃御牧の牧監滋野氏と懇意であった。

この滋野氏は信濃の豪族で「統群書類従」によれば海野氏の祖である。

清和天皇―貞保親王―目宮王―善淵王延喜五年（九〇

大納言正三位信守

五）はじめて醍醐天皇より滋野姓を賜う

また、以前に将門上京の際、貞盛の依頼によって宇治川に布陣、将門を亡きものにした縁故がある。この協力を謝し、再び、ここでの厚意によって、一息つこうとしたものであろう。

貞盛が海野に助けを求め、海野古城に滞留していることを知った平将門は先まわりして信濃国分寺付近に待機して、神川をはさんで千曲川合戦が行われたのである。この日は冬まだ寒い二月二十九日のことであったといわれる。この戦火で旧信濃国分寺が焼失してしまったという。貞盛方上兵他田真樹はこの時矢に当たって戦死、この他田氏は信濃国造の子孫であるとしているから、郡司として国府にあり、貞盛の危急を聞いて、一族郎党をひきいて応援にかけつけたものであろう。従来この上田には国分寺のみあり、国府は松本に移っていたという見方がある。貞盛は運よく山の中にがれ、将門は空しく引きあげる。

「千たび首を掻きて空しく堵邑に還りぬ」

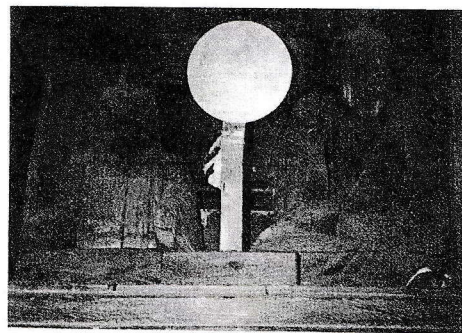
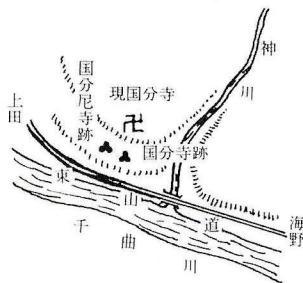
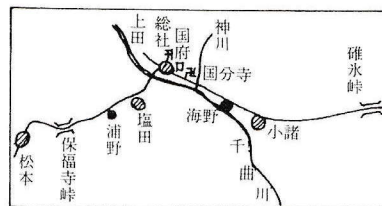
平将門

旅の糧食を失って飢と寒さに悩まされ、やっとのことで京都にたどり着いた貞盛は、太政官に訴え出ており、将門に対する召喚状が出される。

善淵王は真言宗に深く信仰があり、寺を建立した。貞保親王を宮嶽山陵に葬り、神として奉祀した（これが四之宮権現である）

天慶四年（九四一）一月二十日亡なられ、善淵王の法名（海善寺殿滋王白保大禪定門）を取って海善寺と称した。その後天正十五年（一五八七）頃、領主真田昌幸の時に至り、上田城より丑寅の方が鬼門に当るを以て、本寺を現今の地に移し再建して上田城の鬼門除とした。

真田信之が元和八年（一六二二）松代西条にこの寺を移し、開善寺と改め白鳥神社の別当とした。また北御牧村下之城の両羽神社に善淵王の木像が安置されている。



両羽神社内の右善淵王 左ボッカイのダッタン人の木像



平将門